

“炎”をイメージして書きました

© Ai Ueda

若手作曲家の中で群を抜く注目度と実力といっても過言ではないだろう。世界各地でその作品が演奏され、斬新な発想と周到な構成で常に創作界の話題をさらってきた藤倉大。彼の弦楽四重奏作品が待望の日本初演となる。9月に上野学園石橋メモリアルホールで日本初演される、同ホールとロンドンのウィグモア・ホールとの共同委嘱作品《フレア》だ。演奏は世界最高峰の実力を誇るアルディッチィ弦楽四重奏団。今回はダウランド、ジェズアルドなどを現代作品と組み合わせた刺激的なプログラムが生まれ、とりわけ藤倉作品に大きな期待が寄せられている。

「アルディッチィの演奏は、18歳の時にリゲティの第2番のクアルテットを聴いたときの圧倒的な衝撃が今でも忘れられません。僕は新作委嘱を受けると、作品の中に2つの要素を盛り込もうと考えることが多いのです。まず演奏者の良さ、得意技を生かすことができる部分。もう一つは、ちょっと意地悪なのですが、その奏者には弾きにくいかな、あるいは特に得意じゃなさそうかな?と(勝手に)想像する技法による部分です。今回のギターピックで弾く奏法などは、超絶技巧で有名な彼らなので、あえて、弓で弾かさない奏法も入れてやろう、と思って書きました。また彼らのレパートリーには少ない、メロディアスな要素も加えています」

タイトルの「フレア」とは炎を意味する。子供のようにキャンプファイヤーを囲ん



で座り、炎が空に昇る様子を見ているイメージだという。

「第1ヴァイオリンのアーヴィン・アルディッチィから、他人には弾けないような難しい曲を書いてほしいと言われていましたので、演奏が激しくなるあまり木製の弦楽器に火が付き、燃え始めたらどうなるかなと想像をしているうちに、火の粉が飛ぶようなシーンを思いつきました。曲は、あらゆるサウンドが一つひとつつきつきり繋がっているんで、そのスレッドを聴くにはかなり集中力が必要かもしれません。ですから、前日にしっかり栄養をつけて、気合を入れて聴きに来ていただい

ると嬉しいですよ!」

日本では、10月に「サントリーの個展」でパスカル・ガロフをソリストに迎えたバスーン協奏曲の世界初演が予定されている。また2015年にパリのシャトレ座他の共同委嘱のオペラの世界初演も控えている。グローバルに活躍しながら、まだ35歳という若さの藤倉。

「40代はシアターの作品、オペラなど総合芸術に取り組みたいと思います。また科学や自然現象などを勉強し、そこからヒントを得た作品も書いてみたいですね」

取材・文:伊藤制子

藤倉大+アルディッチィ弦楽四重奏団 ~現代音楽と古楽の饗宴

★9月16日(日)・上野学園石橋メモリアルホール ●発売中

☎ 東京文化会館チケットサービス03-5685-0650

IMHオンラインチケット <http://www.ishibashimemorial.com>